

死のある風景

吉村 昭

文春文庫



文春文庫

死のある風景

定価はカバーに
表示してあります

1992年11月10日 第1刷

著 者 吉 村 昭

発行者 新 井 信

発行所 株式会社 文 藝 春 秋

東京都千代田区紀尾井町 3—23 〒102

T E L 03・3265・1211

落丁、乱丁本は、お手数ですが小社営業部宛お送り下さい。送料小社負担でお取替致します。

印刷・凸版印刷 製本・加藤製本

Printed in Japan
ISBN4-16-716925-8

文 春 文 庫

死 の ある 風 景

吉 村 昭



文 藝 春 秋

目 次

標	秋	早	初	煤	金
	の		富		
本	声	春	士	煙	魚
147	123	101	79	53	9

油
蟬
169

緑
雨
189

白
い
壁
211

屋
形
舟
237

あ
と
が
き
257

解説 桶谷秀昭
259

死のある風景

金

魚

彎曲したガラス面に、和金が尾鰭おびれをくねらせながら口吻を突き立てている。開閉する口吻のふちに、はみ出した口紅のような朱の色が刷かれていた。

白、赤まだらのサラサ模様の和金は、ガラスを通して少しふくれ上り、ぼやけてみえる。鱗が電光を浴び、私の方に向けられている黒い眼球がわずかに動いていた。

和金は後退すると、体をくねらせ、反対側のガラス面に口吻をあてはじめた。遠くたった和金の体は一層大きくなり、こちらからすかしてみると、魚体がガラス面いっぱいになり、歪ゆがんで横にのびたりする。和金は、ガラス鉢の中の広さをたしかめでもするように、口吻をあてながら徐々にこちらにまわってきた。

和金を入れたガラスの容器を手に入れたのは、駅の近くの商店街であった。商店街と言っても戦後の闇市の名残りが濃く、入り組んだせまい路の両側に小さな店がひしめき合うように並んでいる。大半が魚、野菜、肉、漬物、豆腐、麺類等の食料品を扱う店で、

夕方などは買物客でごったがえす。

私は、散策の途中、その一廓に足をふみ入れて店にならべられた品物を見て歩く。その日も、迷路のような路をたどったが、人通りの少い露地にある觀賞魚を扱う店の前で足をとめた。入口に近い棚の上に思いがけぬものを見出したからであった。

私は、店内に足をふみ入れると棚に近づいた。それは、巾着絞りの形をした三個の金魚鉢で、重ねられて藁紐わらひもでむすばれていた。終戦前は、金魚を入れるガラス容器といえ、この形をしたものが使われていて、容器の上端が朝顔の花弁状にひらき、ふちが青く染められている。

私は、店の奥から出てきた男に、金魚鉢を一個わけて欲しいと言った。鉢は、カボチャ程の大きさで、小さな金魚を一尾か二尾入れるだけの容積しかない。私は、男が金魚鉢を包装している間に、値段の安い和金を一尾、小さな網ですくい上げると、ビニールの袋に入れてもらった。

私は、家にもどると、金魚鉢に水道の水を入れ、氷砂糖の細片に似たチオ硫酸ナトリウムの結晶粒を一個落した。そして、ビニールの袋をそのまま金魚鉢の水に漬け、袋の中の水の温度が鉢の中の水の温度と同一になるのを待った。チオ硫酸ナトリウムの結晶を入れるのは、水道の水にふくまれた消毒用の塩素を中和させるためであり、袋の中の水を鉢の水と同温にするのは、魚が水温の変化に弱く、死ぬおそれがあるからであった。夕食後、私は、袋の中の金魚を鉢の中に放ち、それを書斎の机の上に置いた。彎曲し

たガラス面は凸レンズの役目をしていて、金魚を上方からのぞきこむと小さくみえるが、横からながめると大きく肥えてみえる。鉢が球形に近いのは、駄金を眼で楽しもうとする庶民の智慧によるものにちがひなかった。

青い鉢の上端を指でふれてみると、ふちが部分的に厚かったり、起伏しているのが感じられた。その感触が、ラムネの玉が鳴る涼やかな音や、縁日でたかれていたアセチレンガスの青白い閃光を思い起させた。

歌麿の浮世絵に、遊女が金魚の入った巾着絞りの形をしたガラス容器を紐でぶらさげている絵があるが、江戸時代には金魚鉢をビードロと言っていたらしい。が、私の少年時代には、単純に金魚鉢、人によっては金魚玉と言っていた。それらは、茶簞笥や下駄箱などの家具の上に置かれていたが、鉢のくびれた部分に紐をからめて軒先などに吊している家もあった。上方がしぼられているので、水の空気に接する部分がせまく、水中の酸素の含有量が欠乏しがちで、鉢の中の金魚は概して元気がなかった。苦しげに水面に口吻を突き出してゐる金魚をしばしば眼にしたし、鉢を傾けて死んだ金魚を濁った水とともに捨ててゐる人を見たこともある。

容器の中央で鰓えらをうごかしていた和金が、またこちらに頭を向けて近づいてきた。透明なガラスの外部に水のひろがりがあると思つてでもいるように、飽きることなくガラス面に口吻を突き立てている。弾力的に伸縮する口吻の中をのぞきこんでみたが、暗くてなにも見えなかった。

頭の中に、かすかに霧状のものが湧いてきた。忘失していた記憶がよみがえるきざしで、多くははつきりした形を結ぶことなく消えてしまうが、スタンドの燈に鱗を光らせた和金を見つめているうちに、過去に眼にしたり耳にしたものが断片的に浮び上ってきた。

私は、父の経営する会社の工員が家に訪れてきた時のことを思い起した。工員は中年の男で、金魚をわけてくれと言った。私は、かれを庭に案内し、瓢箪型の池から小さな金魚をすくい、男の手にしたバケツに入れてやった。男は礼を言って帰っていったが、その金魚が爆弾よけのものであることを私がすでに知っていたのか、それともその時に初めて知ったのかおぼえてはいない。

昼間爆撃が開始された頃だから、昭和十九年の末であつたろう。私は中学五年生で、その年の夏勤労働員先で高熱を発し、診察をうけた結果、中学二年生の折に発病した肋膜炎がさらに悪化した形で再発したことを知った。一応小康を得て勤務先に通勤してはいたが、時折り微熱になやまされて欠勤することもあった。

マリアナ群島を基地とするアメリカ爆撃機の編隊が、晴れた空を高々度で飛来し、その度に爆弾を投下して去ることを繰返していた。すさまじい落下音が空気を激しくふるわせ、私は、防空壕の底に突っ伏し、今にも直撃弾で体が四散するような恐怖を感じていた。

金魚のことを耳にしたのは、その頃だった。金魚と爆弾という組み合わせが奇異に感

じられたが、私は笑うことはしなかった。白い布に赤い糸で千個のコブ目をつくった千人針が、戦場で弾丸よけになると言われて出征する者の必携品にされていたが、それを迷信と感じなかったように、金魚と爆弾の組み合わせも滑稽とは思わなかった。

金魚をおがむと爆弾に当らぬという話は、私の周囲にひろがっていた。近くの指物師の家で、巾着絞りの金魚鉢の前に線香がたかれているのを見たこともあるし、見知らぬ老女が訪れてきて、どこで買ったのか池の金魚をわけてくれと言い、それに応じると代償に配給の煙草をおいていったこともあった。

金魚の話がささやかれていたのは私の住んでいた町だけではなく、隅田川沿いにある勤労動員先の工場でも、従業員たちの話題になっていた。戦局が最終段階に入っていたので金魚を商う者もなく、新たに入手することは困難で、代りに紙細工の金魚が祈禱に使われているということも工場で耳にした。

町が焼夷弾攻撃で焼きはらわれた翌日の午後、焼跡に足をふみ入れた私は、家の庭にある池の水が蒸発し、素焼の焼物のように白っぽくなっているのをみた。亀裂の入った池の底には、金魚の骨のかけらもなかった。

私は、和金の動きを眼で追いながら金魚に無事を祈る人の姿を思いえがいた。

人々が金魚を祈禱の対象にえらんだのは、色彩の失われた生活の中で、美しい鱗につつまれた金魚を、特異な価値をもつものと感じたためかも知れない。犬や猫も飢え、そ